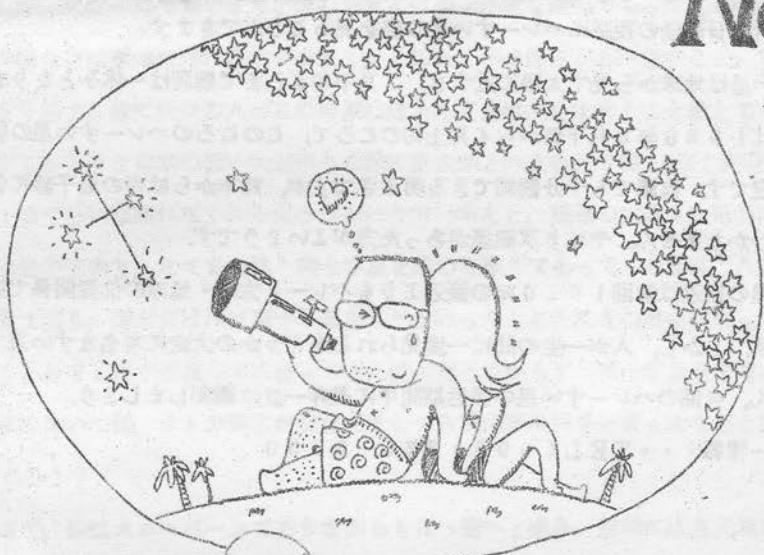


No.127



Jun. 1985

ハレー彗星がやってくる(2)

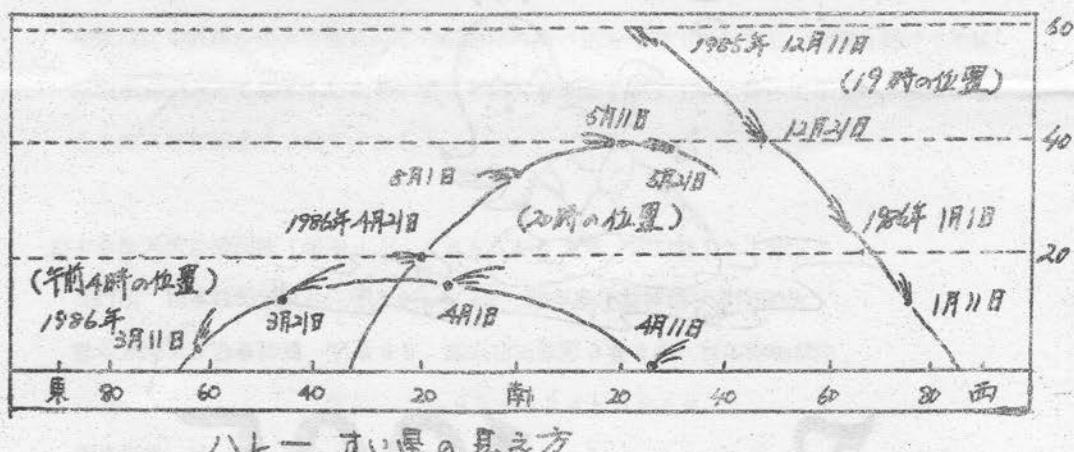
渡辺 和宣

今回のハレーすい星の地球への接近は、2回あります。太陽に一番近づく近日点を通過する前(1985年11月27日)と後(1986年4月10日)です。近日点通過は1986年2月9日です。1回目の接近のころのハレーすい星の明るさは6.5等級なので、肉眼で見るのは困難で観測には双眼鏡がいるでしょう。その後のハレーすい星は地球から次第に遠ざかりますが、太陽に近づいているため明るさは徐々に増し、クリスマスのころは6等級になるでしょう。しかし、12月27日が満月なので、実際の観測は年末の12月31日から1986年1月10日ごろがよいでしょう。空の条件が良い所で日没後の西空にハレーすい星の姿を見ることができます。

その後、ハレーすい星は地球から見て太陽に近すぎ、3月中旬ごろまで観測は一休みとなります。2回目の観測の好期は1986年3月下旬から4月上旬のころで、このころのハレーすい星の明るさは4等級になる予定です。肉眼でも十分観測できる明るさですが、熊本からは南の地平線に低くどの程度見えるのかわかりません。やはり双眼鏡があった方がよいようです。

今回のハレーすい星の接近は前回1970年の接近よりもハレー・太陽・地球の位置関係で観測の条件が悪く残念です。しかし、人が一生の間に一度見られるかどうかの大変に有名なすい星です。星屑の読者のみなさん、今回のハレーすい星の接近期間中に是非一度は観測しましょう。

***NTTハレー情報。。。TEL(096)325-8000



南十字星と八重山諸島

芳野 浩之

星屑No.125で自己紹介をさせて頂きました熊本大学天文研究会の芳野です。この度、春休みを利用しての沖縄県八重山諸島の旅について記事を書くことになりました。星のことよりも紀行中心の記事ではありますが、そのところはよろしく……。

860年3月16日、当初の計画どおり我々2人（筆者と同サークルの福岡昭彦君）は、カメラ三脚、双眼鏡、そして重い荷物を持ってPM10:00博多港の琉球海運“えめらるど沖縄”へ乗船した。天気は雨で南十字星を求める旅には少々不安な出発であった。というのも3月という時期は沖縄地方は極端に晴れの日が少なく、とにかくベタ曇りが多いとのこと。しかも、むこうでの民宿を予約する際に民宿の人がこの時期はほとんど星は見えませんよと教えてくれた。では、なぜ我々がこのような確率の低い大がかりな旅に出たかというと、9泊10日（実際八重山では5泊）の中で1日ぐらいは晴れてくれるだろうという甘い考えと、離島の大好きな筆者には、八重山諸島は最大の魅力であり、たてまえは“南十字星を求める旅”であっても本音は“八重山の島々をじっくり見て廻り、運が良ければ南十字星をも”といったところにその理由があった。もちろん福岡君は景うことなく南十字星一本に較っていたはずだらうから？ 南十字星を幸運にも見ることのできた今日においては、よもや筆者が彼をだまして八重山諸島行きを誘ったなどとは夢にも思っていないであろう？！

さて、船はスローペースでありながらも南へ南へと進み、翌朝には鹿児島の甑島（こしきじま）沖を通過、夕方4時頃にはトカラ列島の宝島、横当島なども姿を見せ、気温の上昇を感じた。空は厚い雲に覆われていたがその夜は天頂付近が晴れ西に傾きかけた双子座などを見ることができた。そして我々が沖縄本島の那覇新港に上陸したのが18日の朝6時。ここが沖縄であるという実感は周りの建物からは感じとれなかつたが、やはり海は青く、気温が高い。天気は晴れで太陽がギラギラと輝いていた、聞くところによると沖縄本島で太陽が姿を見せたのは一週間ぶりとのことである。旅を終えて考えてみると、このときから我々は何かとついていたような気がする。この幸運というものが我々（特に筆者といいたいところだが、福岡君に筆者の弱みを握られている関係上ここでは我々と言っている）の日頃の行いの良さによるものであるということは我々を知っているだれもが疑わないだらう？？？

八重山諸島への船は19日の20:00であるため、18日・19日は本島の観光にあてた。18日はレンタバイクで本島中部の海中公園まで国道58号線を走ったわけだが、途中天気がくずれ

不覚にも雨やどりをしようとして急ブレーキをかけた筆者のバイクは後輪がスリップ・・・後の始末である。このことによって福岡君にひとつ筆者の恥を見せつけてしまったと後悔し、彼もこのことを後々の笑い話にしようと考えていたに違いない。しかし、旅の後半において彼がこれ以上の恥ずかしい行為をやろうとは彼自身予測していたであろうか？

さて、19日20：00那覇港より“ぶりんせす沖縄”的出港である。行き先は石垣島で約19時間の再び長い旅である。天気はひどい雨で今日も星は見えそうにない。しかも今回は乗客が多く特に目を引くのはスキーパーダイビングの団体であった。多大な団体がひしめく中、我々2人は双眼鏡を大事にもって“南十字星を見るんだっ！”などとひそかに乗船した。途中宮古島経由で、20日の昼頃には船の両側に多良間島・水納島（みんなじま）などの美しい島々が見えた。風は強いが天気は良く今日あたりもしかしてと期待がふくらむ。船は15：00石垣港に入る。港からは日本でも1の美しさを誇る竹富島が見える。海の色はみごとなエメラルドグリーンで海の深さによって幾色にも分かれている。ついに念願の八重山諸島へやって来たぞーという感動が筆者の胸をしめつめたことは言うまでもあるまい。様々な個性をもった島が集った八重山諸島であり北緯約24°の南十字星が全景入る八重山諸島である。

この日の夜は、石垣島と西表島の間に位置する小浜島にて宿をとったが、この日も夜になると空はベタ曇り。見えるのは近くの燈台の光のみである。しかし、このころまでは筆者も福岡君もまだ余裕が見られオセロゲームに全神経を集中させている最中であった。

翌21日は筆者のおもむく通り小浜島をじっくりと自転車で見て廻った。島の最高峰99mの大岳（うふだき）からながめる八重山の島々は絶景でひたすら感動のしきりである。ちょっと高い所へ行けば美しい海と島のたたずまいが一望できるというところが離島の魅力ではなかろうかと筆者は切実に思うのである。小浜島というところは、とにかく観光地化がほとんどされてなく、遠々とサトウキビ畑の広がるところである。どうしてこの地を選んだかというともちろん暗い空と南が開けているということを求めたわけであるが、想像していた以上に何もない島で、又そんなところがいいのではあるが・・・小浜での2日目の夜はこれまで雨こそ降らないが、雲が全天を覆い、やはり星を見ることはできないのかと少々のあせりは出たものの、今だなお、2人ともオセロゲームへの執念に燃えていたのは確かであった。

（この文章を読んでおられる方はいつになったら南十字星が出てくるのかと思われているでしょうが、結果を先に申しますと、実はなんと劇的にも南十字星の全景をとらえたのは最終日なのであります。。。だから今ひと時のおつきあいを。。。）

22日、我々は小浜島の宿をはらい、石垣島のロッカーに荷物を入れて、その足で竹富島へ渡った。

た。天気はみごとな晴れでとにかく暑い。日中こんなに晴れるのにどうして夜になると曇るのかと頭にもくる。竹富島へ着き、すぐに短パンTシャツに着がえ島内をまわるが、第1印象として、この島はとにかく明るい。島内1のコンドイビーチは白い砂浜が遠々と続く遠浅の海で水着姿の女の子がまぶしい。観光客をほとんど見かけなかった小浜島に対してこの島はうじゃうじゃといふ。そして白い砂地の道とサンゴの石垣で区画された赤レンガの屋根をもつ家々がとても美しかった。同じ八重山の島でもこうも違うのかとおどろくほどである。ハイビスカスの咲き乱れる道々はどの方向へ行っても海に通じ、再び筆者はこういったところが離島の魅力ではなかろうかと切実に思うのである。この日の夜は、石垣島の宮良というところに宿をとった。西の方向の石垣市の光が少々気になるところではあるが、南の開け方は小浜島よりもよく、砂浜へは歩いて3分ほどである。あとは南十字星が現われるのを待つわけだが、またしても夕方を過ぎて空はベタ曇りとなる。おまけに南十字星の南中する00:00前後には小雨が降り出すという最悪バターン。ここにきて我々のあせりは大となり福岡君は目的を失ったかの様子であり、我々は口々にこれは〇〇君、〇〇先輩のせいだなどと同サークルの人々の名を口走るようになっていた。もちろん筆者は南十字星のみが目的ではなかった? のだからこの発言は福岡君の気持ちを考えてのことではあるが....?

さて、空の状態が気になり、寝不足のまま翌23日を迎えた。天気はまたまた晴れ。今日こそはと気を持ち直し西表島へと出かけた。この日同じ宿に泊っていた一人旅の女性が我々に同行を求め今まで男2人の旅に女性が加わることで少々緊張感はあるが内心はウキウキしていたことはもちろんのことである。西表島も又、先の2つの島とは性格を異とし、ひたすらジャングルの島である。この島のどこかにあのイリオモテヤマネコがいるのかと思うと、速いところへやってきたなあーと実感がわいてきた。我々はマングローブの覆い茂る浦内川をさかのぼり、船着き場より25分ほど山道を歩いた。島の中央にあるマリウドの滝・カンピラの滝がみごとである。同行の女性を入れて記念写真などをとり、石垣島の宿へもどったのが夕方6時頃。空は少々雲はあるものの晴れている。このままいってくれーと空にむかって懇願するのである。日がかけり始めるに西の空に細い月と金星が美しく輝き、沖縄へ来て初めて星らしい星を見た。日が沈みあたりが暗くなると南の空にオリオン、大犬座が姿をあらわし、シリウスが明るい。とそのシリウスの下にこれ又ギラギラと輝く星があった。カノープスである。高い!とにかく高い!はじめはその星が何であるのかさえわからなかったぐらいである。熊本でもかなり低い位置に見えるこの星があまりに普通の星のごとく、ありがたさなく輝いていた。(ちなみにここでのカノープスの高度は約13°) 時間は夜の10時で空はまだ晴れていた。東の空にカラス座がのぼり、いよいよかと心がはずむ。夜中の0時前ケンタウルス座のδ, γ, ε, θ, η, ρが姿をみせるとρを結ぶ水平線方向にケンタウルス座の

Fが見える。南十字星の十字架の一番上の星 γ が見えるのはもうまじかである。Fを見つけてどのくらいいたったかわからないが水平線上にうす雲がかかる中、福岡君が“あれ？じゃない？”とほそっと言った。この時の感動というものは書きようがない。とにかく興奮していた。 γ は明るく肉眼で色も識別できる。橙黄色で、高度は 9° である。しばらくして、今度は十字架の右端の δ が姿をみせた。しかし、うすぐもりの中です、 δ は見えかくれする。双眼鏡を目から離さず、両方が同時に見えたところで2個だけでもいい！と思わずカメラのシャッターを切ってしまった。もちろん三脚のみであるから20秒程の固定撮影である。撮影が終り、今度は非常に明るい星団を見ながら十字架の左端の星 β を待った。時間はもう1時を過ぎ雲がかなり広がってきた。今日はこれが限界かと思いや、 γ が雲で消されると同時にその雲の移動によって、これ又明るく白い星 β が出てきた。もう完全に興奮の絶頂である。あっ出た！あっ消えた！などとお互い口走りながら何度も同じことを言ったかわからない。まもなく全天はあの厚い雲に覆われたが、まずはひと安心で、明日沖縄最後の夜は全景を見るぞとその夜は興奮のためあまり寝れなかった。

翌25日は八重山での最終日であり、この日は石垣島を予定していたが、何と我々はついているのであろうか。この日は石垣島底地ビーチでの海開きの日で、全日空、日航のキャンベンガールがやって来ること。我々がこの八重山諸島の旅で常時使用していた“離島情報誌”の裏表紙の写真に全日空のキャンベンガールが載っていて、毎日のように彼女のかわいい顔をみていたわけであるから、我々がどんなに胸の高鳴りを覚えたかということは南十字星を見たときの感動と劣るに足りない？！ さっそく福岡君と協議の上、今日は海開き一本に絞ろうということになり、底地ビーチへとむかった。ここで言っておきたいことは石垣島を廻る予定の日に海びらきがあるということは我々の日程上では全くもっての偶然であり、筆者があらかじめ仕組んだことではないということである？ 海びらきの会場には400人以上の人人が集り、気温も 26° と最高の日である。お目当ての全日空キャンベンガールの鷲尾いさ子さんは予想どおりとても可愛いかった。（81-59-86は彼女のプロポーションである、あしからず。） 帰り道、黒真珠センター内のあろうはずもないと思っていたガラスに正面衝突をして女性の店員に笑われた福岡君は、もはや筆者のバイク転倒の件について笑うことのできない身分となっていた。

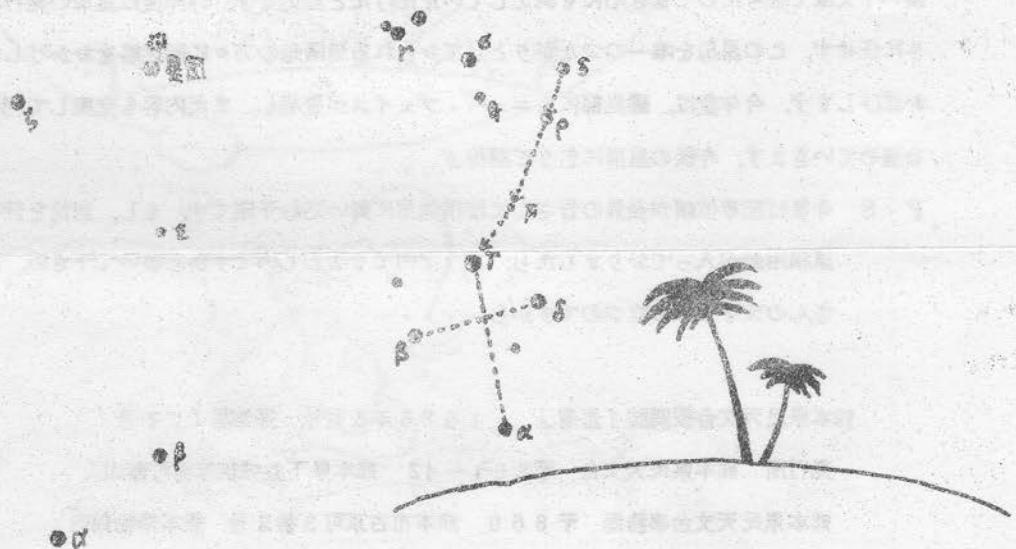
この日の夜も空は暗れ、我々は日が暮れると同時に外へ出て、日焼けのはだをさすりながらカノープスの観望にひたっていた。昨日同様、カラス座が東から昇り、ケンタウルス座の各々の星が姿を見せ、0時前南十字星はやはり高度の高い順に γ 、 δ 、 β の順にあらわれた。残るはあとひとつ高度 3° のみであるが、水平線上にはうす雲がある。双眼鏡から目を離さずにじっと眼を待ち、ついに0時15分、水平線の少し上にかすかに光る α が見えてきた。 7° の視野をもつ双眼鏡には、

南十字星の4つの星がきれいに入り、ついに全景を見ることができた。八重山最後の夜に南十字星を全景見ることができ満足感がひしひしと伝わった。幸運にも南十字星を見ることができて我々の旅は大成功である。

天気は良を見たあと下り坂にむかうが、ここまでできたらケンタウルス座の α , β もとねばったそしてねばったかいあり、1時頃 β があらわれ、少しして β よりも少し東寄りにほらしきものが輝く。水平線ギリギリにしては明るく星図から見ても β であることはまちがいなさそうである。

これで我々の長い旅はケンタウルス座の α , β のおまけつきで、心配していた天候にもめぐまれ大成功のうちに終った。もうひとつおまけに、海開きの様子を報じた八重山新聞にしっかりと筆者が写っていたことを記しておこう。最後に、南十字星と言えば、サイパン・グアム・ハワイなどが相場ではあるが、日本では八重山諸島へ行けばその全景を十分に満喫することができる。というところでこの文を読んだ福岡君が筆者に対してどういう態度に出るかということを心配しながら、"南十字星と八重山諸島"を終りたいと思う。

亂調な文ではありましたか、みなさんも八重山諸島へどうぞ。



天文台日誌より

- 4/16 おいでまっせ“城南町”的取材でNHK報道陣が天文台へ来襲。来台中の会員の口々から某雑誌よりすごいとの声がしきり。（永原）
- 4/23 月面（月齢3.3）危機の海がよく見えた。（岩田）
- 4/24 双眼鏡とテープレコーダーを持参しての来台者あり。テープレコーダは星座の説明を2・3度聞くんですが、すぐに忘れるので持ってきたそうです。（松下）
- 4/25 土星が10時には見えるようになりました。半月もすると、一般公開で見てもらう事ができるようになるでしょう。（渡辺K）
- 4/30 —200到着。艶島さんが一所懸命組み立てようとされたが不調、第二ハウスに合うか？久しぶりに小林さんを見た。（永原）

編集後記

木下(KURUMI)

星屑127号いかがでしたか？今回は芳野くんの記事で埋まってしまいましたが、非常に内容の濃い文章だったので皆さんにも満足していただけたと思います。昨年度は星屑の発行回数も思うに任せず、この星屑を唯一のつながりとしておられる遠隔地の方々に御迷惑をおかけしたことをお詫びします。今年度は、編集部にもニュー・フェイスが登場し、また内容も充実して円滑に作業を進めていきます。今後の星屑に乞うご期待//

P・S 今後は記事依頼が会員の皆さんに縦横無尽に舞い込む予定です。もし、封筒を開けて中に原稿用紙が入っておりましたら、どうぞ何でもよろしいですから書いて下さい。星屑は皆さんの文字で成り立つのですから.....

熊本県民天文台機関誌「星屑」 1985年6月号 通巻第127号

発行所 熊本県民天文台 〒861-42 熊本県下益城郡城南町藤山

熊本県民天文台事務局 〒860 熊本市古京町3番2号 熊本博物館内

Tel 096-324-3500

編集担当 K. KINOSHITA